

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

(A 教職大学院等研修プログラム開発事業)

報 告 書

プログラム名	三重県における若手教員の資質能力向上研修プログラムの開発－教職大学院と教育委員会の連携・協働を通じた若手教員研修プログラムの開発－
プログラムの特徴	(1)教職大学院の授業カリキュラムの基本理念「地域の教育課題の発見・解決」と三重県教育課題「教員の資質能力向上」を具現化する研修機能をもった講座（授業）を，教職大学院と三重県総合教育センターとの共同で開発・洗練すること。 (2)教職大学院で開講される授業の選択科目の内容を，若手教員を対象とした研修に対応可能な内容へと開発・洗練すること。 (3) 三重県教育委員会が実施する初任者研修（個別選択研修）のひとつである「附属学校訪問」に対応した教職大学院専任教員による講義内容を開発・洗練すること。

平成 30 年 3 月

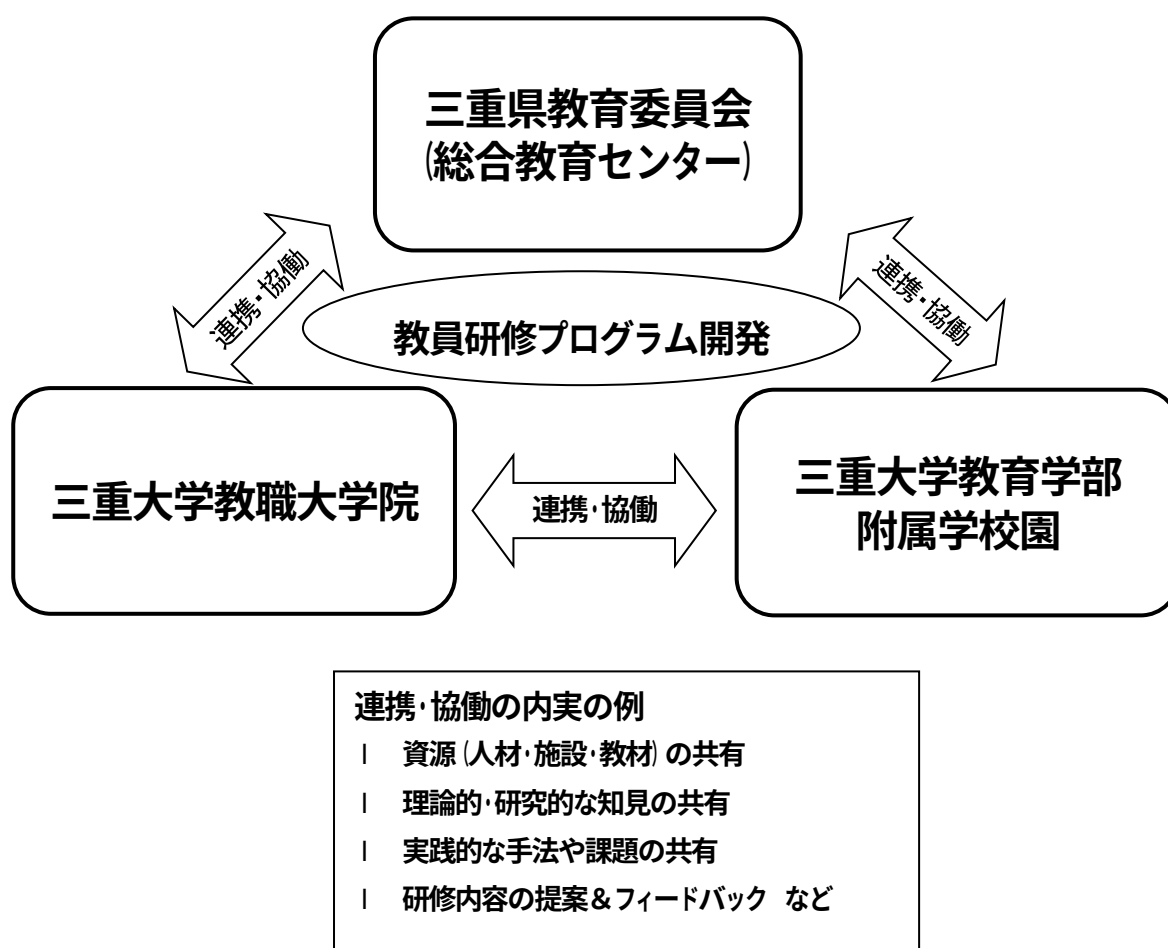
機関名 国立大学法人三重大学

連絡先 三重県津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部

プログラムの全体概要

平成 29 年度に開設される三重大学教職大学院のカリキュラムは、三重県における「地域の教育課題の発見・解決」を中核（コア）科目として設定したものであり、この科目は三重県教育ビジョンを踏まえて構築されている。また、本研修プログラムの構想に先立って、平成 28 年度には、三重県教育委員会との連携・協働の具体的な形として、県の総合教育センター（以下センターと表記）で開講される初任者研修の一部を、教職大学院の専任教員が担当した。その背景にあったのは、教職大学院の学部新卒学生が、授業の一環としてそれら初任者研修を受講することで、教員採用後の初任者研修の一部免除を実現することであった。平成 29 年度は、こうした背景のもとで実施された初任者研修プログラムの成果を発展的に継承し、教職大学院とセンターとの連携・協働を通じた若手教員の資質能力向上を目指す新たな研修プログラムを開発することを目的とする。

なお、本研修プログラムにおける連携・協働の理念モデルは、以下のとおりである。



Ⅰ 開発の目的・方法・組織

1. 開発目的

本研修プログラムは、平成 28 年度の初任者研修プログラムの成果を発展的に継承し、教職大学院とセンターとの連携・協働を通じた若手教員の資質能力向上を目指す新たな研修プログラムを開発することを目的とする。平成 28 年度との研修プログラムの違いは、教職大学院との連携講座として提供する初任者研修の講座数を増やすこと、そして対象者を初任者だけでなく教職 2～3 年次の若手教員を対象とする講座へと拡大・発展させることにある。

本研修プログラムの開発に先立って、特に教職大学院が開設に至るまでの期間（平成 27 年度から 28 年度）にかけて、三重大学では、三重県教員委員会に対して様々な連携・協働の要請を行うとともに、大学として三重県の教育に対してどのような貢献ができるのか、それを教職大学院の授業カリキュラムにどのように反映させていくかについて、様々な角度から検討を進めてきた。とりわけ、三重県教育委員会事務局研修推進課とは、三重県の教育課題解決のために、どのような内容とテーマの研修を行う必要があるかについて、何度か協議を重ねてきた。その結果、多様で困難な教育課題に対応できるような教員の資質・能力の向上を共通目標に据えることが必要との認識で一致してきた。

以上のような背景から、連携・協働の一つの形として、三重県教育委員会が行う初任者研修のなかに、教職大学院の授業の一部を研修として取り込み、「三重大学教職大学院連携講座」として運用することとし、本年度はそれを拡大・発展させる研修プログラムを開発することにした。

2. 開発の方法

「三重大学教職大学院連携講座」を担当するのは、三重大学教職大学院の専任教員である。それぞれの教員が、教職大学院において担当する授業との関連のもとに、連携講座における研修内容を考案した。センターで実施される初任者研修には、校外研修が 17 日あり、その内訳は、一斉研修 10 日と選択研修 7 日である。このうち、選択研修は、異校種連携研修 1 日、ネット DE 研修 2 日、個別研修 4 日で構成される。「三重大学教職大学院連携講座」は、この個別研修のなかのオプションとして計画されるものである。内容としては、教職大学院の授業カリキュラムのうち、学部新卒学生対象の「教育実践力開発コース」の選択授業科目群のなかの「授業研究としての教師のライフヒストリー研究」「ICT を用いた授業改善とアクティブラーニング」「表現教育としての教育実践」「学級づくりへの実践的アプローチ」の 4 つの授業について、センターの初任者研修に取り入れて所定の時間数の開講の可能性を検討することにした。

3. 開発組織

本研修プログラムは、次の表に示す構成員により事業を進めてきた。大学側からは、教職大学院の専任教員が中心となって、研修を担当した。三重県教育委員会からは、総合教育センターの研修推進課の課長・班長がメンバーとして入っている。

No	所属・職名	氏 名	担当・役割	備 考
1	三重大学教育学研究科・教授	森脇 健夫	研修プログラム開発企画, 教職大学院側総括責任者, 実施担当, 研修プログラムの評価	教職実践高度化専攻専任教員
2	同・准教授	織田 泰幸	研修プログラム開発企画, 教職大学院側担当リーダー, 実施担当	同上
3	同・教授	須曾野 仁志	研修プログラム開発企画, 実施担当	同上
4	同・准教授	天野 智裕	研修プログラム開発企画, 実施担当	同上
5	同・准教授	飛岡 美穂	研修プログラム開発企画, 実施担当	同上
6	同・特任講師	笹屋 孝允	研修プログラム開発企画, 実施担当	同上
7	同・特任講師	園部友里恵	研修プログラム開発企画, 実施担当	同上
8	三重大学教育学部・教授	松浦 均	研修プログラム開発企画, 実施担当	附属小学校長
9	三重大学学術情報部 社会連携チーム 係長	山下 泰子	契約事務担当	
10	三重大学財務部 契約チーム 係長	岡田 慎一	経理事務担当	
11	三重大学教育学部チーム 総務主任	早川 典子	事務担当窓口	
12	三重県教育委員会事務局・ 研修推進課課長	小松 貞則	研修プログラムの企画・運営	
13	三重県教育委員会事務局・ 研修推進課班長	古市 卓司	研修プログラムの評価と指導助言	

II 開発の実際とその成果

1. 研修の実際

本研修プログラムの対象者は、①三重県の教職員のうち初任者研修および教職 2～3 年次研修の対象者（前者は約 400 人、後者は約 650 人が対象。ただし本研修プログラムの対象となる講座は選択講習のため、受講人数は研修課題によって異なる）および②教職大学院に在籍する学部新卒学生である。研修の趣旨やテーマに応じて内容や方法は異なるが、基本的にはグループによる PBL 方式を採用した。具体的には、研修の対象者をグループに分け、1 グループ 4 名の演習形式で、教員や学校の具体的な問題の発見および解決を意識した体験型の研修を進めた。

本研修プログラムの具体的な実施時期、テーマ、および各講座の目的（研修概要）は、以下の表のとおりである。

時期等	研修テーマ（担当）	目的（研修概要）
2017 年 6 月 13 日 (火)	教職 2～3 年次教員のための授業力アップ研修：「授業研究を通じた教師の専門性の開発」（笹屋孝允）	授業研究を通して教員としての専門性を伸長させることを目的とする。具体的には、授業研究の意義についての理解を深めながら、授業研究と日々の教育実践とをどのように関連づけるのか、ミドルリーダー・スクールリーダーとなった際に校内研修体制をどのように構成するのかについて検討し、これまでの教職経験を省察するとともに将来への展望を持つ。
2017 年 8 月 22 日 (火)	初任者研修のうち個別研修：ワークショップ「言語・非言語コミュニケーションと協働」「学校現場のコミュニケーションを振り返る」（園部友里恵）	表現的な営みとしての教育実践として注目されている演劇知・身体知の理解およびワークショップを通じたコミュニケーション能力の向上を目的とする。具体的には、学習者の思考と表現、そのプロセスの作成といった課題の検討。アクティブ・ラーニングの手法を活用したワークショップによりコミュニケーション能力を高める。「インプロ」のワークショップを体験することを通して、日々の教育実践について「コミュニケーション」という視点から振り返る。
2017 年 8 月 28 日 (月)	初任者研修のうち個別研修：「参加型アクティブラーニングと ICT 学習利用」（須曾野仁志）	情報通信技術（ICT、情報機器やネットワーク等）を活用した学習の進め方や、ICT の活用を通じて学習者に支援方策についての理解を深めることを目的とする。具体的には、アクティブラーニングの導入・展開・評価に関する理解、学習者が主体的に学ぶ学力につながるプレゼンテーション、学習者主体の参加型・発信型学習をどう実現・支援するかについて知る。
2017 年 11 月 14 日 (火)	初任者研修（個別研修）「附属学校訪問」：（森脇健夫）	授業参観や研究協議を通して、授業方法の改善等、教科指導についての実践的指導力を高めることを目的とする。具体的には、附属小学校における授業参観前のオリエンテーションの中

		で、初任者教員が抱える悩みや課題、授業を見る視点や授業改善において大切なポイント、事後協議における視点について、具体的な事例を交えながら紹介・検討する。
2017 年 12 月 19 日 (火)	初任者研修のうち個別研修：「初任者教員として大切なこと～教育研究の成果と著名な実践家に学ぶ～」(織田泰幸)	初任者教員として大切になる心構えや態度について認識を深め、これから教師として成長するための自己解決を明確にすることを目的とする。具体的には、教職独自の特性の理解、授業から学ぶ、子どもを育む、学級の荒れを立て直す、同僚や管理職から支援を受けるといったテーマに即した知識、先人の授業づくり、学級づくりに関する実践的なスキルを修得する。
通年	初任者研修等校外研修の授業実践研修 公開授業の助言 (①天野智裕, ②飛岡美穂)	①教職経験の異なる教員(初任・6 年次・経験 11 年次の教員【教諭・養護教諭・栄養教諭等】)が校種別・教科別に研修班を構成し、授業研究を通して、継続的な相互研鑽による授業改善を図り、授業力の向上をめざす。 ②教職経験の異なる教員(初任・6 年次・経験 11 年次の教員【教諭・養護教諭・栄養教諭等】)が校種別・教科別に研修班を構成し、授業研究を通して、継続的な相互研鑽による授業改善を図り、授業力の向上をめざす。

各研修のテーマと内容は、平成 28 年度に実施された講座の成果と課題を踏まえて発展的に継承されたものである。今年度の初任者研修・教職 2～3 年次研修において、教職大学院の基本理念である「理論と実践の往還」の実現を目指した研修が実施されることで、研修対象者たちの受講後の実践活動に対してポジティブな効果を持つと考えた。

2. 研修の評価方法、評価結果

本研修プログラムの評価は、①受講者からの研修講習アンケート結果(資料 1-⑦を参照)、②講習担当者の自己評価(次節の 3. 成果を参照)、③センターからの評価をもとに実施した。

①のアンケート結果を見ると、内容についての受講者からの評価は全般的に高かった。また③と関わっては、本講座を参観したセンターの担当者から、初任者にとって「具体的な対応策を学ぶ絶好の機会」「有意義な時間」となったこと、そして「学びへの意欲や『学び続ける教員』としての意識の高まりを感じることができた」といった評価を受けた。

3. 研修プログラムの成果

大学における評価

本研修プログラムの成果は、①三重大学教職大学院と三重県教育委員会の連携講座(「三重大学教職大学院連携講座」として企画・実施されたこと、②「初任者研修」だけでなく、「教職 2～3 年次教員のための授業力アップ研修」へと対象を拡張できたこと、③本講座

を受講した教職大学院の学部新卒学生が、三重県の教員となった際の初任者研修の一部免除に向けて前進できたこと、にあると考えている。とりわけ、③のような教職大学院の学生に対するインセンティブと連動した連携講座の実現は、おそらく他の教職大学院においてはほとんど例のないものであり、三重大学教職大学院からすれば、三重県教育委員会との連携・協働の具体的な好事例として位置づけられるものと考えている。

アンケートにおける受講者からの評価の全般的な高さは、教職大学院の専任教員が、学校現場において実際に役立つ内容を構成し、現在の教師のライフステージの課題にマッチした方法を工夫した成果が表れていると思われる。教職大学院では「理論と実践の往還」が課題であるが、学校現場で通用するコンテンツ（内容）とメソッド（方法）のリソースを蓄えつつある。三重県の現職教育の一端を教職大学院が担う体制が整いつつあると言ってよい。

ただし、今後のより質の高い研修講座の開発のためには、いくつかの改善すべき課題もあると思われる。今回の連携講座の実施を通じて明らかになった講座担当者および研修受講者双方からの内省的な評価を総括しながら、より質の高い「理論と実践の往還」を実現する講座の開発に努力する必要がある。

研修担当者のコメント

以下では、研修を担当した教職大学院の専任教員からの自己評価コメントを掲載する。

(1) 教職2～3年次教員のための授業力アップ研修

「授業研究を通じた教師の専門性の開発」 （担当：笹屋孝允）

成果

- ・ 教師としての成長に欠かせない授業研究の1方策である授業記録のとり方を考える研修プログラムであり、実際に記録のとり方を受講者と共有することができた。受講者の中には授業記録をとった経験がこれまでになかったり、校内で研究授業が行われない学校（高等学校や特別支援学校など）に所属したりしており、この経験が受講者の今後の成長に大きく寄与すると期待される。
- ・ 授業記録をもとにした省察の手立ても同時に扱った。省察も教師としての成長には欠かせないものであり、この経験が受講者の今後の教職にポジティブな影響を与えられられる。

課題

- ・ 3時間1回のみの研修であり、継続性に乏しい。継続することでこの研修プログラムの効果がさらに大きくなることが予想されることから、継続的な研修プログラムを構築していくことが課題であると考えられる。

(2) 初任者研修 個別研修の選択講座（三重大学教職大学院連携講座1）

「学校現場のコミュニケーションを振り返る」 （担当：園部友里恵）

本講座のねらいは、「インプロ」のワークショップの体験を通して、日々の教育実践について「コミュニケーション」という視点から振り返ることであった。インプロとは、台本や事前の打ち合わせがなく、相手とのコミュニケーションを手がかりにその場で物語を生み出していく即興演劇のこ

とである。インプロは、その理論や方法論が「ゲーム」として蓄積されていることに特徴があり、演劇経験のない者であっても学びやすいものである。本講座では、特に「言語／非言語コミュニケーション」に焦点を当て、まず参加者自身にインプロのゲームをいくつか体験してもらい、その体験を言語化することで自らの教育実践を振り返るという流れで進めた。

昨年度と同講座の課題として、①体験に時間が割かれ内省の時間を充分に取ることができなかった、②コミュニケーションをとる対象が広範にわたり焦点を定めて深いディスカッションをすることができなかった、という2点が挙げられた。そこで今年度は、本講座を3時間の単独講座として開講することで、十分な内省時間を確保し、受講者間の共有につなげることができた。また、コミュニケーションをとる対象を、「子供」「保護者」「同僚教員」の3観点に絞ることで、より深い内省に結びつけることができた。

来年度に向けて、「初任者」であるからこそ抱えてしまうコミュニケーション場面での課題や悩みを、ともに探究していける場となるよう努めていきたい。また、インプロのゲームは、授業や学級会、保護者会等、様々な場面ですぐに活用できるものでもある。今年度は、初任者自身のコミュニケーションについて内省し深めていくという文脈が強かったが、「すぐに使える」という点もインプロのメリットの1つであり、そうした点も初任者の支援につながると考えられる。来年度は、深める場面と、すぐに使える「道具」としてのインプロを紹介する場面、両者のバランスをとっていききたい。

(3) 初任者研修 個別研修の選択講座(三重大学教職大学院連携講座2)

「参加型アクティブラーニングとICT学習利用」(担当:須曾野仁志)

取り上げた内容は、「アクティブラーニングと教員の生涯学習」「コンピュータ学習利用の歴史1980年代半ばより」「授業でICTを利用する上での流行は?」「教育工学は教育(工)学」「デジタルネイティブ」「マルチメディアラーニング」「インストラクショナルデザインの進め方」などであったが、約3時間でこの内容を学ぶには盛りだくさん過ぎたかもしれない。教育・学習方法について工夫したことは、一方的な講義型の講習にならないように、スマートフォンを使うことで調べる学習を取り入れたり、ミニプレゼンテーションカード「3s(スリーエス)カード」を使って、授業でICTを利用する上での流行や留意点を3項目にまとめさせたりした。「3sカード」で書いたことについて、小グループで交流させる活動も取り入れた。

講習時間としては、やはり6時間程度あるとよい講習内容であったが、受講後の感想を読むと「講習後すぐに教室で実践できる内容でよかった。」「ICTを使うのは教師より学習者に使わせることが大事」「学習者参加型・発信型学習の大切なことがわかった。」というコメントが多く、こちらが意図したことがよく伝わっていたと思われる。参加者の中には、大学学部時代に教職授業「教育の方法と技術」や「教育工学」に参加した元学生が数人おり、現場で教育工(夫)学を実践している教員もいることがわかり、それは大変やりがいを感じることであった。

次年度以降、同じ内容の講習を実施することを考えると、コンピュータ室での実施や、普通教室での情報タブレット(人数分あるとよいが)の活用を検討していきたい。

(4) 初任者研修 個別研修の選択講座（附属小学校訪問）

「オリエンテーション 初任期にこれだけは身につけたいこと」（担当：森脇健夫）

本年度は、附属小学校における初任研のオリエンテーションを担当させていただいて 2 年目になる。今回の研修講座において新任教師 79 名に対して伝えたかったメッセージは、① 新任期に特徴的な課題が存在すること（子どもの問題行動への対処等）、② うまくいかなければ「うまくいかないのは当たり前」と思うこと、③ 新任期に直面する課題に対して「引きこもり」にならずに、周りの教師の力を借りて課題解決を図ること、である。

初任者（79 名）に簡単なアンケートを実施したところ、特に、1. 「児童・生徒個人の課題、あるいは関係」、2. 「学級経営上の問題」、3. 「授業づくりや授業実践上の問題」の 3 点については、80%以上が「課題（悩み）」を感じており、課題（悩み）は「ない」の回答は 0 であった。

今後は、初任者のこうした切実な声に応えられるようなオリエンテーションにしていきたいと考えている。

(5) 初任者研修 個別研修の選択講座（三重大学教職大学院連携講座 3）

「初任者教員として大切なこと～教育研究の成果と著名な実践家に学ぶ」（担当：織田泰幸）

今年度は、昨年度に実施した講座の反省を踏まえて内容と方法を開発した。研修では、事前に受講者の学校段階・性別を可能な限りバラバラにして 4 人 1 組のグループを組んだうえで、グループごとの議論とワーク、および映像鑑賞を取り入れながら授業を進めた。内容については、昨年度の反省を踏まえて、資料のポイントを整理するとともに、配布資料の精選、映像鑑賞の時間短縮のための工夫を行った。

研修後の受講者アンケートの自由記述には、「とても身になる研修だった」「明日から実践できることがたくさんあった」「非常に勇気づけられた」「現在の課題やハードルを乗り越えるヒントが得られた」という記述がみられ、今回の研修のねらいは、ある程度は達成されたように感じた。またグループ編成についても、「寺子屋方式は話しやすく、メンバーとの距離も近く、活発な議論ができた」、「異校種の先生とグループワークをするとクラス運営（褒め方、叱り方、ノートチェック）などすごく参考になる」といった意見があったため、受講者たちの満足につながる形態を採用できたと思われる。

ただし、来年度以降の課題として、以下を挙げておきたい。今回の受講者の所属校は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校と幅広かったため、全ての受講者、受講者のニーズの適切に対応した内容を提示できたわけではない。講義の内容は、一般論になるか、著名な実践家の考え方の紹介に留まり、受講者の中には、講習後の実践に生かせる内容ではなかったかもしれない（そのあたりは今回のアンケートからは読み取れなかった）。今後は、初任者である受講者たちにとって、より実践的な意義を有する内容を、研究や理論と照らし合わせながら構築していく必要がある。そのためには、受講者自身の日頃からの教材研究の成果が問われることになる。

県教委からの評価

教員の資質能力の向上に向けて実施したセンターと三重大学教職大学院との連携講座の成果について記す（受講後のアンケートによる受講者からの感想等は資料 1－⑦を参照）。

(1) 三重大学教職大学院連携講座について

平成 28 年度より試行的に実施してきた三重大学との連携講座は、平成 29 年度に三重大学教職大学院が新設されたことに伴い、「三重大学教職大学院連携講座」として 1 講座増やし、4 講座を実施することとなった。4 講座の内訳は、初任者研修対象者の講座として 3 講座、教職 2～3 年次研修対象者の講座として 1 講座となっており、4 講座すべて三重大学教職大学院を会場として実施した。講座の内容については、若手教員が抱えやすい悩みや課題をふまえた講義、演習であり、若手教員にとっては具体的な対応策を学ぶ絶好の機会となった。

講義だけではなく演習やワークショップ形式を取り入れたり、他者と関わる機会を多く設けたりして、教員に必須のコミュニケーション能力を高めるための実践的な内容が随所に盛り込まれており、初任者にとって有意義な時間となった。そのため、受講者の活用度、満足度も高く、こういった姿勢で日々を送っていくべきかを再確認できたようであり、受講者の感想には「明日からの教育実践に是非とも活かしていきたい」「授業を見る視点や授業改善に向けて問題意識が明確になった」など、実践につながる意欲的な内容が多く見られた。

研修担当として各講座に同席し、受講者の様子を注意深く観察したが、学校現場とは違った視点で若手教員へのアプローチがあったことで、受講者の学びへの意欲や「学び続ける教員」としての意識の高まりを感じることができた。

(2) 三重大学附属小学校訪問について

森脇教授の講義では、まず本県の若手教員の最大の課題である職場でのコミュニケーションについてお話をいただいた。初任者がわからないことをため込まず、人を頼ることの大切さを具体的かつ丁寧にお話いただいた。受講者からは、「初任期は、『きく』ことで力をつける時期であり、『わからない』と助けを求めることが自分の成長につながり、子どもたちや学校のためになるということがわかった」などの感想があった。

また、ルーブリックの活用による授業づくりや授業研究における参観の視点などを具体的な例を交えながら教えていただいた。授業を見る視点や授業改善に向けて問題意識が明確になり、参観後の協議も共通の視点で話し合うことができ、実りの多い研修となった。

初任者は、「相談できることは有能」という言葉を胸に、周りに支えられていることを実感し、改めて子どもたちと向き合い、明日からの教育実践に取り組んでいこうという前向きな気持ちを得たように感じた。

(3) 授業実践研修について

授業実践研修は、初任・6 年次・11 年次の教職経験が異なる教員が、校種別教科別の研修班に分かれ、年間をとおして授業研究を中心に、授業改善及び授業力の向上をめざす研修で

ある。

研究協議では、6 年次や 11 年次の教員から授業についての経験にもとづいた指摘やアドバイスなどが出され、様々な意見が交流される。しかし、自らの実践や経験から得られた事項を中心とする協議となり、専門的、理論的な事項についての深まりにはやや欠ける。そこで、今年度は、小学校の国語・算数・社会、中学校の国語の計 4 班の授業実践研修に対して教職大学院の教員 4 名の参加を得て、授業参観後に実施した研究協議の中で専門的、理論的な助言を受けることができた。

受講者の感想には「教職大学院の先生のお話を聞き、もっと勉強したいと思った」、「教職大学院の先生が指摘された『グループ学習の後の児童たちの理解度の確認を』という言葉が印象的だった」など、受講者間だけでは見いだされなかった視点に気付かされたという記述があるように、学びがより深いものとなったと考えられる。

4. 今後の研修実施上の展望と課題

以上の成果を踏まえて、今後の研修実施上の展望と課題を整理する。

県教委から三重大学教職大学院への要望として

(1) 連携講座の回数について

- ・ 平成 30 年度は、5 講座以上を開設してほしい（初任者や教職 2～3 年次の教員以外を対象とした講座についても開設を希望する）。
- ・ 受講希望者が計画的に受講できるよう、4 月初旬に「講座開催日」を決めてほしい。

(2) 連携講座の実施時期について

- ・ 平成 30 年度連携講座の開催希望日は、以下のとおりである。

ア 4 月 25 日～1 月 31 日の期間（研修を行わない期間 8/13～8/17, 1/4～1/7 は除く）

イ 6 月 5 日, 6 月 12 日, 6 月 26 日, 8 月 17 日, 8 月 20 日, 8 月 28 日, 10 月 23 日, 11 月 13 日, 12 月 25 日, 12 月 26 日を除く原則火曜日（長期休業中はその限りではない）

大学側として

- ・ 三重大学教職大学院は、三重県教育委員会からの要望を真摯に受け止め、これに応えるための準備を組織的に進めていく。
- ・ 平成 30 年度の「三重大学教職大学院連携講座」は、平成 29 年度の体制を継続するとともに、講座数の増加と対象の拡張（例：初任者研修以外の対象者のための講座の開設）の実現へ向けて、様々な専任教員が、講座を担当できるようにするための準備と検討を進める。
- ・ 各講座は、基本的には毎年同様の内容と方法を採用することになるため、教職大学院の専任教員はより質の高い魅力的な講座の開発と洗練に努める必要がある。

III 連携による研修についての考察

大学における考察

平成 29 年度の「三重大学教職大学院連携講座」は、初任者研修だけでなく、「教職 2～3 年次教員のための授業力アップ研修」での連携講座を実施することができた。今後は、中央教育審議会の答申や有識者会議の報告書にあるように、教職大学院には、「現職教員の再教育」(教育・研修機能)、「大学と教育委員会・学校との連携協働のハブとしての機能」、「大学による地域貢献の主導的役割」、「インセンティブの付与」への要請の高まりを受けて、これらに対応ができる研修の体系化について検討を進めていく必要があるだろう。

なお、「三重大学教職大学院連携講座」は、現在は三重県教育委員会との連携・協働によるところが大きい。今後は、市町等教育委員会、三重大学教育学部附属学校園、そして教職大学院における長期実習の連携協力校との連携・協働の在り方を模索しながら、三重県の教員の資質・能力の向上に寄与するという大きな使命のもとで、より強固な連携・協働の体制と関係が構築されるよう継続的かつ積極的に検討を進めていく必要がある。

県教委における考察

教職大学院と教育委員会の連携を強化し、研修の機会を充実させることは、教職生活全体を通じた教員の資質能力の向上を支援する機能が拡充することとなる。また、大学の知見や専門的な視点は理論に裏付けられたものであり、それらを様々な課題を抱える学校現場において直接活かすことは、学校現場のニーズに対応することにもつながる。

今年度は、連携講座においてどのような研修を実施していくことが有効であるか、大学院側と十分に協議し、本県の若手教員の課題であるコミュニケーション力の向上を図ることをねらいとした講座を構築した。講座運営においても講義形式だけでなく、ワークショップなどを取り入れ、教員同士が対話をとおして学び合う場を設定した。

来年度からは、今年度策定した「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」をふまえた研修計画に基づいて、校長及び教員が教職生活を俯瞰しつつ、自らの職責、経験等に応じて計画的・効果的に資質能力の向上に努めることができるよう研修を実施していくことになる。

その指標には、教職着任時に求められる資質能力も記されていることから、大学との共通認識や緊密な連携がより必要となってくると考えられる。そのような中、教職大学院ともさらなる連携・協働を模索していきたい。具体的には、連携講座を初任者研修や教職 2～3 年次研修などの若手教員研修だけでなく、教職経験全般にわたり、様々な教育課題に対応した講座にも位置付け、三重の教員の資質能力の向上を図っていくことが考えられる。

IV その他

〔キーワード〕 教職大学院 三重県教育課題 連携講座 初任者研修 教職 2～3 年次研修教員のための研修、「理論と実践の往還」

〔人的規模〕 D. 51 名以上

〔研修日数〕 A. 1 日以内

【問い合わせ先】

国立大学法人 三重大学 教育学部

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577 TEL 059-231-9346

三重県教育委員会（総合教育センター）研修推進課

〒514-0007 三重県津市大谷町 12 番地 TEL 059-226-3572

〔資料 1〕

研修の講義資料

- ① 教職2～3年次教員のための授業力アップ研修
- ② 初任者研修 校外研修の個別研修の選択講座（三重大学教職大学院連携講座2）
- ③ 任者研修 校外研修の個別研修の選択講座
三重大学教育学部附属小学校訪問
- ④ 初任者研修 校外研修の個別研修の選択講座（三重大学教職大学院連携講座3）
- ⑤ 初任者研修校外研修の授業実践研修 公開授業の助言①および②

＊これら資料は一部のみの抜粋です。なお連携講座1の配布資料はありません。

研修の感想

- ⑥ 研修後の受講者の感想のまとめ

他大学の聞き取り調査

- ⑦ 教職大学院と教育委員会との連携・協働に関する聞き取り調査（記録）

〔資料 2〕

- ① 三重県教育ビジョン1「地域に開かれ信頼される学校づくり」
- ② 三重県教育ビジョン2「教職員の資質向上とコンプライアンスの推進」